

珍部坂 A ・ B 遺跡

—— 平成 3 年度県営圃場整備事業掘地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ——

1992

茅野市教育委員会

序 文

珍部坂A・B遺跡はこの度県営圃場整備事業堀地区に伴い、記録保存を前提に緊急発掘調査を茅野市教育委員会が実施したものであります。

発掘調査では縄文時代中期前半の竪穴住居址と土壇が各1基ずつ発見されただけに留まりましたが、今回の発掘調査により、珍部坂遺跡が小規模な集落であることが確認でき、同時に調査された城遺跡、水尻遺跡と一連の遺跡群であることが明確にできたことは大きな成果でした。

今後広域に亘る発掘調査により数多くの縄文時代集落の資料が得られることですが、生活領域や遺跡群の相互関係を考える上にも本遺跡のような位置環境にある遺跡群のもつ重要性を改めて考える必要があるでしょう。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会、地元地権者、関係機関の皆様の深いご理解とご助力により、無事終了できましたことを心からお礼申し上げます。

平成4年3月

茅野市教育委員会
教育長 両角昭二

目 次

序 文

第I章 調査経緯……………	1	第III章 遺構と遺物……………	5
第1節 発掘調査に至るまでの経過……………	1	第1節 検出された遺構……………	5
第2節 調査の方法と経過……………	2	第2節 発掘された遺物……………	8
第II章 遺跡の概要……………	3	第IV章 結 語……………	10
第1節 遺跡の地理的環境……………	3		
第2節 遺跡の基本的な層序……………	5	図 版	

珍部坂A・B遺跡土器観察表

挿図番号	出土地点	部位	施文 (A表・B裏)	整形 (A表・B裏)	胎土・焼成・色調	時期
第5図1	1住	口縁・胴部	A、RL縄文、隆帯楕円区画、隆帯脇逆C字形連続刺突、胴部指頭圧痕	A、胴部指頭圧痕 B、板状工具ナデ整形	白色粒子、長石・褐鉄鉍粒子、若干雲母粉良好、茶赤褐色	藤内I式
2	1住	口縁	A、高い隆帯による複合三角区画、隆帯脇逆コ字連続刺突	A、器表ナデ B、ナデ整形	白色粒子、良好、赤茶褐色	藤内I式
3	1住	口縁	A、口唇部下逆コ字連続刺突、ペン先状工連続刺突	B、ヘラミガキ	白色岩石粒子、良好、赤茶褐色	
4	1住	胴部	A、低隆帯、隆帯脇逆コ字状連続刺突、抽象文曲隆帯	B、ミガキ	白色岩石粒子、長石・石英粒子、黒茶色	藤内I式
5	1住	胴部	A、管側を押し引く逆C字連続刺突	A、横位指頭圧痕 B、ヘラの雑な横位ナデ	長石粒・雲母粉、普通、赤茶褐色	藤内I式
6	1住	胴部	A、半載竹管状工具による長方形区画(パネル文)	B、横位ミガキ	白色粒子、混入物は少ない、良好、赤褐色	藤内I式
7	1住	胴部	A、半載竹管状工具による隆線の区画、区画脇管側による連続D字刺突	B、ミガキ	白色・灰色岩石細粒、良好、淡茶褐色	藤内I式
8	1住	胴部	A、曲隆帯で区画、区画内三叉状沈線充填	B、ザラザラ	石英粒子・雲母粉でザラザラ、黒赤褐色	異系統
9	1住	胴部	A、棒状工具による斜行沈線	B、ザラザラ	長石粒子・雲母、赤褐色	異系統
10	1住	口縁	A、RL縄文	B、ナデ	割合大粒の川砂、石英粒子、淡黄褐色	異系統
11	1住	口縁	A、RL縄文、棒状工具による沈線	B、ヘラナデ	長石粒子・雲母、良好、黒茶褐色	平出3A系
12	B遺跡表採	口縁	A、3に類似する構成、管側による逆C字連続刺突、ペン先状工具連続刺突	B、ナデ	長石・石英粒子、雲母粉、良好、赤褐色	
13	B遺跡表採	口縁	カワラケ	A、ナデ、Bナデ	混入物はなく粉状、良好、淡黄褐色	中世
第6図1	1住	胴部	A、左手を胸部・右手を腹部にあてたポーズ、乳房表現有、腹部に張りはない、肩にペン先状工具による連続刺突 B、臀部は逆ハート形、側面にペン先状工具による連続刺突が渦巻状等に施文	A・B、ナデ	長石細粒子・白色岩石粒子、良好、黒茶褐色	

第 I 章 調査経緯

第 1 節 発掘調査に至るまでの経過

平成 3 年度から開始された県営圃場整備事業堀地区は、豊平地区と湖東地区と接する地区から事業の対象とされ、本年度は堀地区集落の南側一帯の台地、谷部から事業が行われることが計画されていた。この実施地区内には珍部坂、水尻、城と呼ばれる尾根状の台地が位置していた。昭和 54 年度八ヶ岳西南麓遺跡分布調査報告書においては、この地区に鎮辺坂・堀遺跡の登録がされていたが、遺跡内容等の実態は不明で、該地はその立地よりその他にも遺跡の存在する可能性が高かったために現地調査を実施した。その結果小規模な縄文時代と思われる遺跡が 2 ヶ所発見された、その為新たに遺跡名を見直す必要が生じ、小字名を再度調査した。その結果昭和 54 年度の調査の際に鎮辺坂遺跡と命名されていたものは小字より城、堀とされていたところは水尻、珍部坂と判明したために、平成 2 年度に作成した遺跡分布図ではこのように変更した。その為『茅野市史』上巻等に記載されている鎮辺坂遺跡は城遺跡、堀遺跡は水尻遺跡、珍部坂 A・B 遺跡のことである。

本遺跡の保護について平成 2 年 5 月 14 日に茅野市教育委員会が実施した平成 3 年度以降の公共事業地区内にかかる埋蔵文化財の実態調査について茅野市農業基盤整備家より 5 月 31 日付で回答があった。それによると県営圃場整備事業堀地区に伴い 8 か所の遺跡が地区内に位置することが確認され、その内 4 か所が平成 3 年度の計画地区に該当することが判明した。これに基づき 6 月 11 日付 2 教文第 130 号平成 3 年度の農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財の保護（通知）が長野県教育委員会より提出され、堀地区の鎮辺坂（城）、堀 A（水尻）、堀 B（珍部坂 B）、堀 C（珍部坂 A）についての事業の概略を上げた。平成 3 年度農業基盤整備に伴う埋蔵文化財の保護協議が 10 月 4 日に開催され、上記の遺跡について平成 3 年度の補助金計画を上げ事業に対応するように決定した。この協議結果として平成 2 年度 12 月 10 日付 2 教文第 7-81-11 号、城・水尻・珍部坂 A・珍部坂 B 遺跡の保護について（通知）が長野県教育委員会より提出された。それによると遺跡の保護については、珍部坂 A 遺跡の場合事業地区内にかかる 1,590㎡以上を、珍部坂 B 遺跡の場合 716.6㎡以上を発掘調査し、記録保存をはかるというものであった。この計画を受け茅野市教育委員会では平成 3 年度文化財関係補助事業計画を上げ事業に備えた。

平成 3 年 5 月 15 日付 3 諏地土第 91 号をもって「埋蔵文化財包蔵地発掘委託契約書」を取り交わし業務に入った。

本調査に入る前に遺跡内容が不明確なため、台地南側について試掘調査を実施することとし、6 月 5 日、6 日の両日に亘り調査計画に沿ってトレンチを設定し、遺構の範囲と遺物の包含状況の把握を目的に試掘を実施した。この調査の結果を 6 月 17 日現地において長野県教育委員会小池

幸夫指導主事、諏訪地方事務所土地改良課、長野県土地改良事業団体連合会、茅野市農業基盤整備課、茅野市教育委員会文化財調査室で協議が行われ、その結果検出遺構が少なかったこと等による事業縮小に伴う調査計画の見直しが必要となった。8月13日付2教文第7-81-11号で再度県営ほ場整備事業（堀地区）にかかわる城・水尻・珍部坂A・珍部坂B遺跡の保護について（通知）が長野県教育委員会より提出され、これに基づき本調査に入った。

8月27日付で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託の変更契約を締結した。それによるとA遺跡は総額532,000円（農政部局負担385,000円、文化財負担147,000円）で、B遺跡は総額269,000円（農政部局負担195,000円、文化財負担74,000円）で事業を行うこととした。

第2節 調査の方法と経過

本遺跡はその規模・内容が不明な遺跡であった。そのため調査の主眼は台地上における遺跡の広がり、遺構・遺物の埋蔵状況の確認であったために、任意に地形に沿った形でトレンチを設定し、必要に応じ調査区を拡張する方法とした。

遺跡範囲の確認調査は、6月5・6日に実施し、ちょうど台地の横断をとる形で南側斜面にトレンチを設定した。B遺跡場合トレンチの幅は約2mで約4m間隔で開けたが、遺構、遺物の確認はなされなかった。この調査結果にもとずき、本遺跡は遺物包含層も不明確な散布地で珍部坂A遺跡より遺物が流されてきた可能性が強いことが確認され調査を終了した。A遺跡のトレンチは約4mで5～7m間隔をもち設定した。その結果竪穴住居址1、土壌1が検出された。

発掘調査の経過 珍部坂A遺跡の調査区の設定はB遺跡と同様に地形の状況を把握するために尾根状台地を切る形でトレンチを設定した。尚、面的な調査を実施した部分についてはグリッド方式とし、公共座標 $y = -25630.000$ を基準軸とし、A～Cの3点を下記のように設置した。A $y = -25630.000$ 、 $x = 2090.00$ B $y = -25630.00$ 、 $x = 2080.00$ C $y = -256.00$ 、 $x = 2070.00$

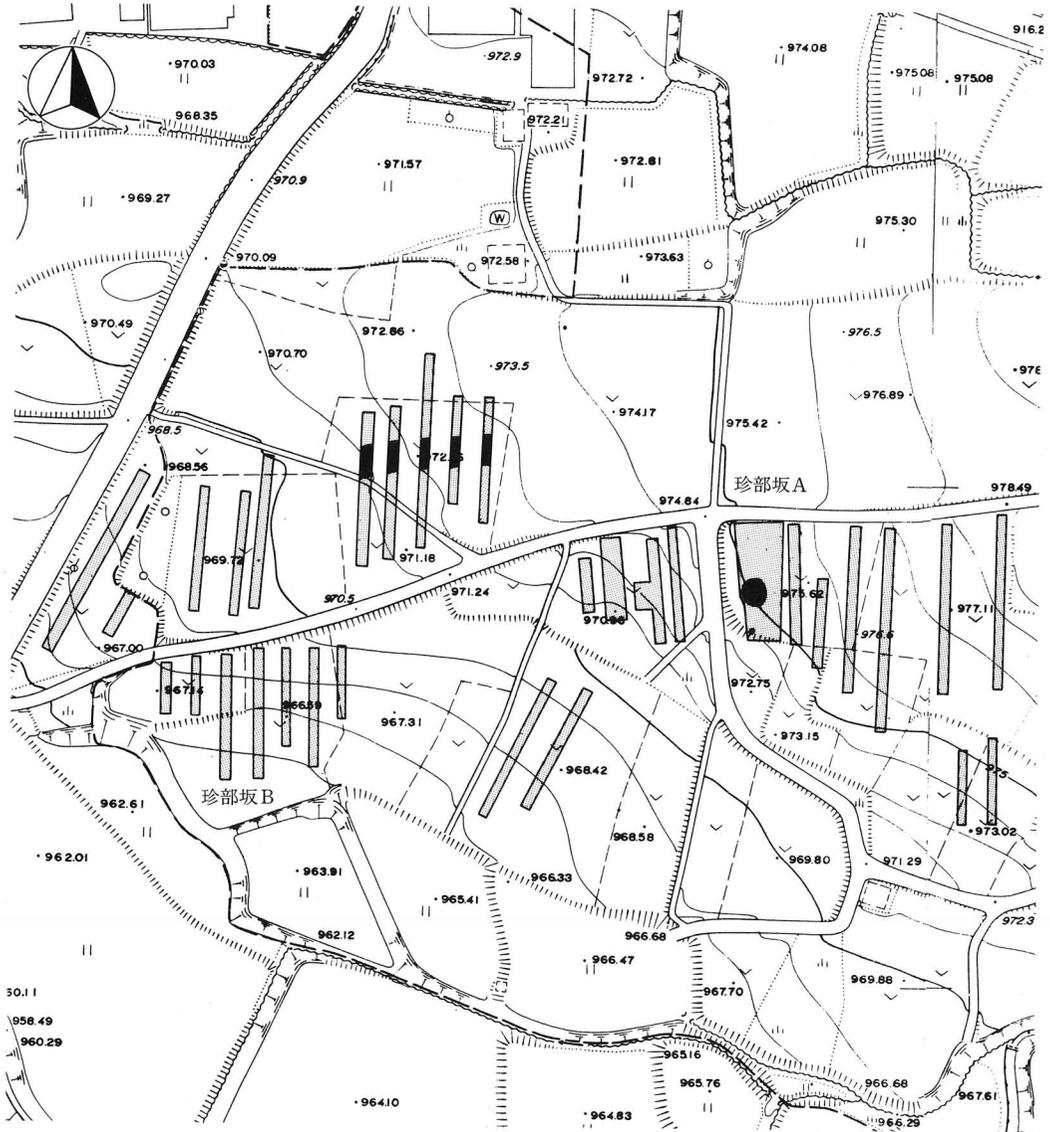
遺跡の範囲確認調査は6月5日から行われ、トレンチによりA遺跡は1166 m^2 、B遺跡は376 m^2 が調査された。これにより珍部坂A遺跡は台地南側斜面を中心に展開するもので、その規模は大きくなく単独に住居址が存在することが確認された。尚、事業対象外である台地中央部に遺構群が展開する可能性も考えられるが、表面採集では遺物の散布がまばらで、多くの遺構群が埋蔵されている可能性は低い。調査は他の堀地区の遺跡と平行して行われ、8月1日より本調査に入る。検出された遺構が少なかったことや、天候に恵まれたこと等より作業は順調に進み8月9日には現場における作業は終了した。8月2日には住居址覆土内より土偶胴部が出土した。

遺物整理、報告書作成が本格的に開始となったのは、他の発掘調査が終了した12月からである。報告書の作成は伊東、守矢が行い杉本が補助した。原稿の執筆は守矢が行った。

調査組織

団長 両角昭二 調査員 鶯飼幸雄 小林深志 守矢昌文(現場担当) 功刀 司 小池岳史 伊

東みゆき(現場担当)事務局 両角一夫 調査補助員 杉本裕子 発掘作業協力者 五味ふみ 堀田桜子



第1図 珍部坂A・B遺跡の地形と発掘区 (1/1,500)

第II章 遺跡の概要

第1節 遺跡の地理的環境

遺跡の立地 珍部坂遺跡は、八ヶ岳の火山活動により形成された尾根状台地に立地し、台地上

を珍部坂A遺跡、台地南側斜面のものを珍部坂B遺跡としたが、むしろ同一の遺跡で遺跡内での地点が異なるものとして捉えることができはしないか。

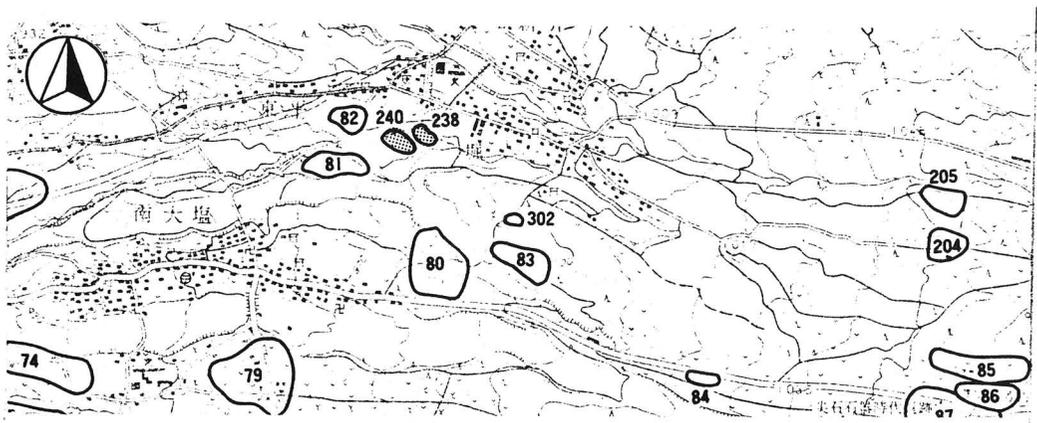
珍部坂遺跡の立地する北側に隣接し堀地区と城遺跡の立地する台地と、谷を挟んで南大塩地区が位置する。遺跡の立地する台地は、堀地区から山寺地区、長倉地区にかけて延びる長い尾根状台地の一部が分岐して小規模な尾根状台地を呈している。調査前はこの南側斜面付近遺跡範囲が広がるものであろうと考えられていたが、作付等の関係より遺跡範囲を限定するまでにはいたってはいなかった。また、台地の南側斜面は緩やかな傾斜となっており、かなりの部分まで遺跡が広がるものであると想定されていた。

遺跡の立地する台地は南大塩地区が位置する台地などと同様に幅のある広がりを持つもので、部分的に小さな細い尾根が分岐する場所もある。台地の上部は西側、南側へゆるやかな傾斜を持っているがほぼ平坦であり、標高は975mである。南側の斜面は緩斜面となり沖積地面と接しているが、珍部坂B遺跡が位置すると思われる部分は沖積地面と接する箇所がやや微高地状となっており他の南側斜面と比較するとより緩やかな斜面となる。北側の堀地区と接する部分は浅い小規模な谷状地形となっているがその斜面は八ヶ岳西南山麓台地特有の切り立った崖状ではなく緩やかなものである。台地上と沖積地面との比高は9mを測る。

遺物の散布状況 遺物は台地頂部の平坦な部分のやや南側によった範囲に稀薄に散布していた。このように小規模な散布地であったために、昭和54年度実施の八ヶ岳西南麓遺跡分布調査や、茅野市史等に取り上げられることがなく、その内容も明確にならなかったものであろう。

周辺の遺跡 遺跡周辺には数箇所の遺跡が点在している。珍部坂A・B遺跡の立地する同台地上に隣接するように水尻遺跡が位置する。本遺跡と同様に今回の調査対象となり調査が行われ、縄文時代中期中葉の小規模な遺跡であることが判明している。本遺跡の南側に隣接する台地上には縄文時代中期初頭、中葉、平安時代の遺構がやはり今回の調査で検出された城遺跡が立地する。

この周辺で最も規模の大きな遺跡は、城遺跡の谷を隔てた南側台地に位置する立石遺跡で試掘調査の結果では縄文時代中期後半の集落が検出されている。



第2図 周辺の遺跡 (1/25,000)

遺跡規模の差はあるが、珍部坂遺跡の立地する周辺は遺跡の集中箇所として捉えることができ縄文時代中期中葉の遺跡群として捉えることができ、遺跡の相互関係を調査するためには重要な地域である。

第2節 遺跡の基本的な層序

本遺跡の基本的層序は、台地頂部に南から北方向へちょうど台地を横断するように設定したトレンチにより行った。珍部坂A遺跡の場合台地上を平坦面から斜面肩に掛けての横断を、珍部坂B遺跡の場合斜面から沖積地に至る緩やかな斜面部を横断するような形を取る。それによると珍部坂A遺跡の基本的層序は下記のとおりである。

- | | |
|------------|---|
| I層 耕作土 | 現在の耕土で、色調は黒色で割合粘性にとんでいる。土層全体に深耕が及んでおり、ソフトな感触である。 |
| II層 黒色土 | 色調はI層より黒色味が強く割合しまっている。堆積は割合厚い。地表よりビニール等が混入しており表土層よりの深耕による攪乱が本層に及んでいることが窺える。 |
| III層 褐色土 | 全体的に締まりのある土層で、1mm以下のローム微粒子を含有する。 |
| IV層 茶褐色土 | III層よりもローム微粒子の量が多くなり色調が茶色味を増す。 |
| V層 黄褐色土 | ローム粒子が大きめになりその量も多くなる。漸移的な土層である。 |
| VI層 ソフトローム | |

遺物包含層は層が該当するもので、表面採集により検出された遺物は深耕等により露出したものであろう。遺構の掘り方はIV層下層よりなされているものと思われる。

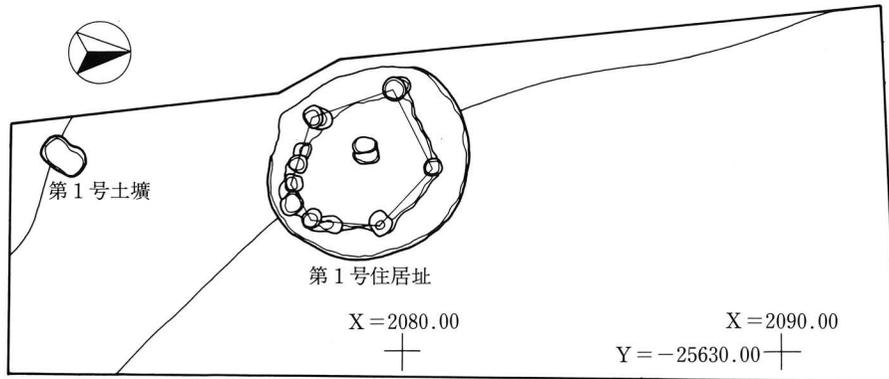
B遺跡の土層はA遺跡の土層堆積状況とは異なりがみられ、台地斜面部では耕作土の次にパミスを混入する黒色土が薄く堆積しており基盤層に至る。沖積地面と接する部分では台地上から流れ込んだと思われる黒色土が厚く堆積する。

第III章 遺構と遺物

第1節 検出された遺構

今回の調査に於いてA遺跡より竪穴住居址1、土壇1が検出されたが、B遺跡では遺構は検出されていない。遺物の散布状況等を考慮すると、B遺跡で採集された少量の遺物はA遺跡より流れ込んだ可能性が強くA・B遺跡が一体のものであると考えられる。また、B遺跡に於いて近代に建設された諏訪佐久鉄道の軌道敷と思われる箇所が検出されている。

住居址 第1号住居址(第4図) 調査区の南側斜面付近に検出された住居である。平面形は北西から南東方向に長軸を持つ5.64m×4.95mの楕円形に近い不整形を呈する。長軸方向は

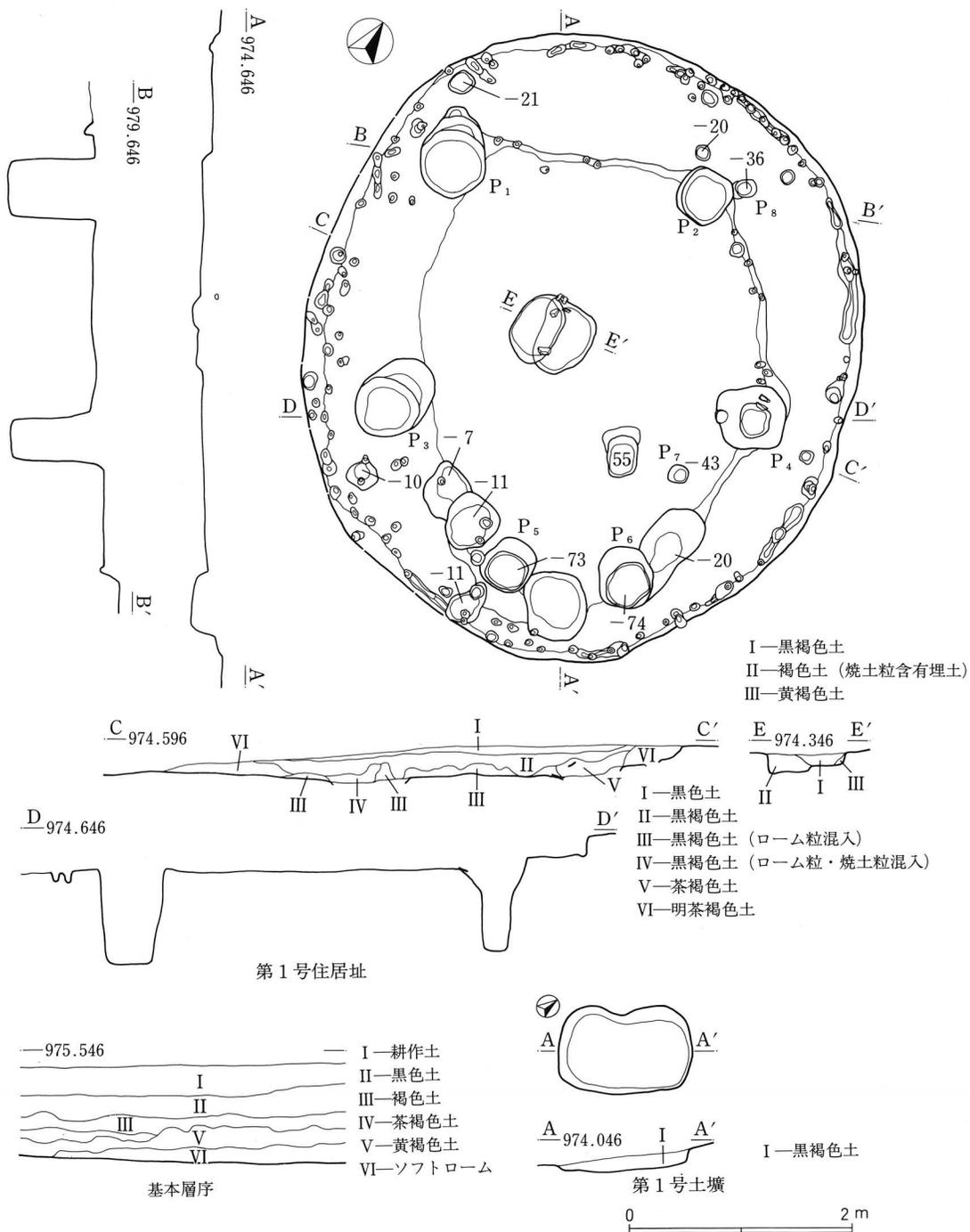


第3図 珍部坂A遺跡遺構全体図 (1/200)

N-31°-Wを示す。壁の立上りは北、東、南側は明瞭であるが、西側は地形が緩やかな傾斜を持つため流失しており、そのために検出することができなかった。最も高い部分で10cm前後である。壁際には径が約10cm前後の小孔が一重に巡っている。この小孔と組み合わせられて途切れ途切れに部分的であるが周溝が検出されている。検出された小孔は壁体構造に関わるものと思われる。支柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄・P₅・P₆の6本と思われ深さも平均76cmと深くその掘り方もしっかりしている。このような大型の柱穴の補助柱穴と思われるP₇・P₈が検出されている。柱穴配列は六角形に配されており、出入口部と思われる位置の柱穴配列は他の部分より近接している。西側に位置するP₁・P₃の2本には立替えによると思われる重複がみられた。支柱穴をつなぐように間仕切りに関わると思われる段差が認められ、外区と内区がこの段差により区画される。床は外区の方が硬く、内区部の方が軟弱な傾向を示す。内区部の床は住居中央部に向かい緩やかな傾斜を持っており、中央部の3.9m×3.1mの不整楕円形の範囲が浅い皿状の窪みになる。炉は住居の長軸線上に北西側へ奥まった位置の、軸線よりやや西側に寄った位置に検出された。不整楕円形の径40cm×65cmの浅い皿状の掘り方が重複して検出された。西側の掘り方は、2m～3m大の焼土粒と3mm大のローム粒を割合多量に含んだ褐色土で埋められたような状況を示していた。支柱穴の立替え状況、炉のあり方等より本址は最低2回以上の立替えが行われたものと思われる。炉石の大半は抜き去られ遺存していなかったが、北西隅と南西隅に10cm大の礫が遺存しておりこれが炉石の一部であろう。炉の掘り方は西側は深く、深さは15cmを測る。東側は10cmの深さを持つ。焼土は認められず炉内より掻き出されたものと思われ、若干の焼土粒子が炉の掘り方内に堆積していたに過ぎない。

覆土は6層に分層できた。壁際にはローム粒子を含む明茶褐色土が堆積していた。床面上にはローム粒を混入する黒褐色土が堆積していた。本層は床上に約10cmの厚さで堆積し、硬く締まった状態が観察でき、ロームの床面上に貼り床がなされていたことが窺える。この黒褐色土はちょうど内区の範囲に分布する。

本址よりの出土遺物は少量であった。住居址覆土第II層を中心に若干の土器片や、石器が出土



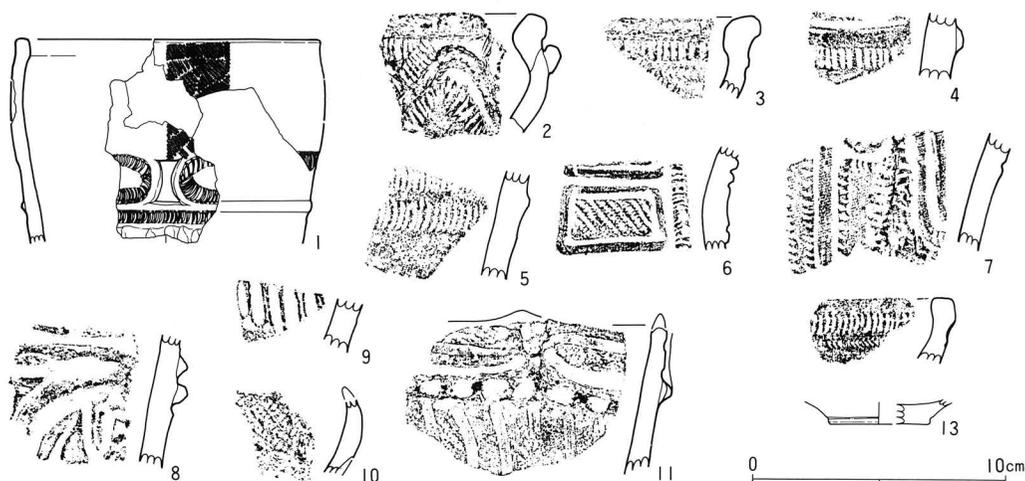
第4図 珍部坂A遺跡第1号住居址・第1号土壇・基本層序 (1/60)

している。その中で炉址掘り方北西側より検出された土偶胴部は特筆するものである。床面より13cm浮いた状態で、頭部を西側に正面を向いた状態で検出された。その状況は住居址が廃絶した後土偶が廃棄若しくは安置されたことを示しているような様子であった。その他にP₄の東側に位置する計11cmの小孔内より粗製石匙（第8図5）が突き刺さったような状況で出土している。遺物ではないが、P₇内には川砂利が充満していた。床面直上からの遺物の出土は少なく覆土内からを中心に遺物が出土する状況である。復原可能な深鉢形土器が炉付近より出土している。この他に中期中葉の土器片76、打製石斧3・破片2、粗大石匙等2、礫器1、黒曜石碎片、剥片63が出土している。唯一器形復原ができた深鉢形土器よりみて中期前半藤内I式期に帰属しよう。

土壌 第1号土壌（第4図） 土壌は調査区南側に1基の確認がなされている。今回土壌と認識したものは、その状況は大変貧弱であった。口径が大きく平面形は不整楕円形を呈し、長軸方向はN-37°-Eを示す。掘り方は不明瞭で浅いものであった。覆土は黒褐色土が充満し、遺物等の検出はなされていない。

遺構の分布について 今回の調査では遺構の構築されそうな南側斜面を中心に調査区を設定したが、他の遺構は検出されず単独で中期前半竪穴住居址が検出されただけである。台地の平坦部は今回の事業地区外であったことより調査の対象とはなっていないが、表面採集を実施してみると遺物の散布はみられない。このことより珍部坂A遺跡は今回調査した範囲が遺跡の主体である可能性が強く、小規模なものとして捉えることができよう。本遺跡を単独のムラと想定するよりも、むしろ今回同時に調査した城遺跡、水尻遺跡などと一体のものとして捉えることが妥当であろう。

第2節 発掘された遺物

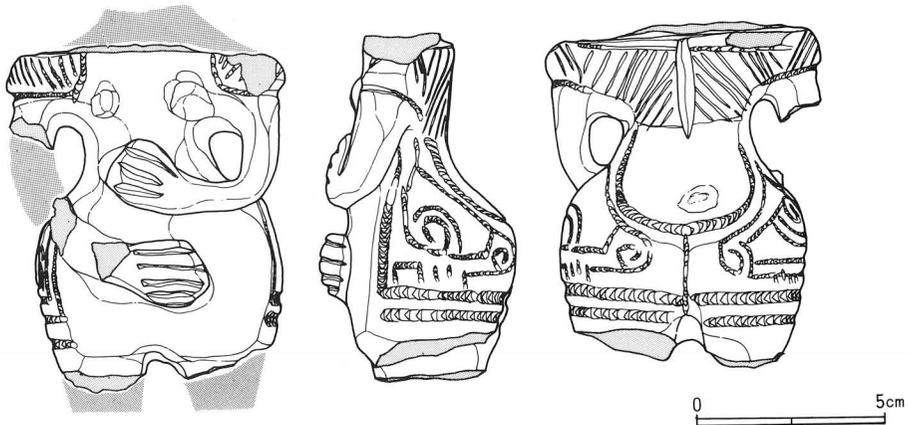


第5図 珍部坂A・B遺跡出土土器 (1/3) (1は1/6)

遺物の概要 今回の調査により得られた資料は珍部坂A遺跡では縄文時代中期前半の遺物が、B遺跡の場合、平安時代土師器片、中世内耳土器片、カワラケ片が若干得られただけである。珍

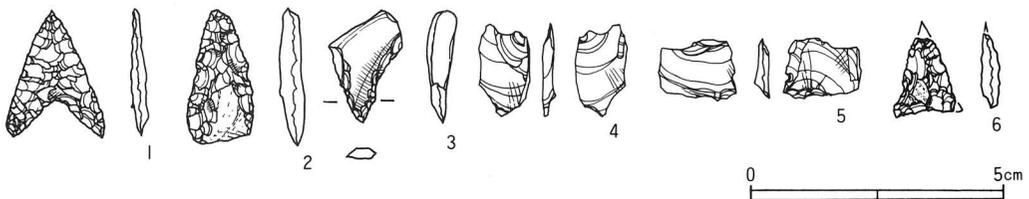
部坂A遺跡の場合中期中葉藤内I式期に帰属する土器群と、本期に帰属すると思われる土偶胴部で、これは形態に特異性がみられ特筆するものである。

1. 土器 (第5図) ページ数の関係よりその全てを上げることはできないが、A遺跡の概要をみると、連続爪形刺突文等が施文される一群が中心となり、これに曲隆帯文を施文するもの等が加わる。これらは全て1号住居址の覆土内より出土している。B遺跡でもA遺跡と同時期の土器片が1点採集されているが、磨滅が著しくA遺跡より流れ込んだ可能性が強い。この他の土師器等は細片でその量も少ないことより詳細については不明である。



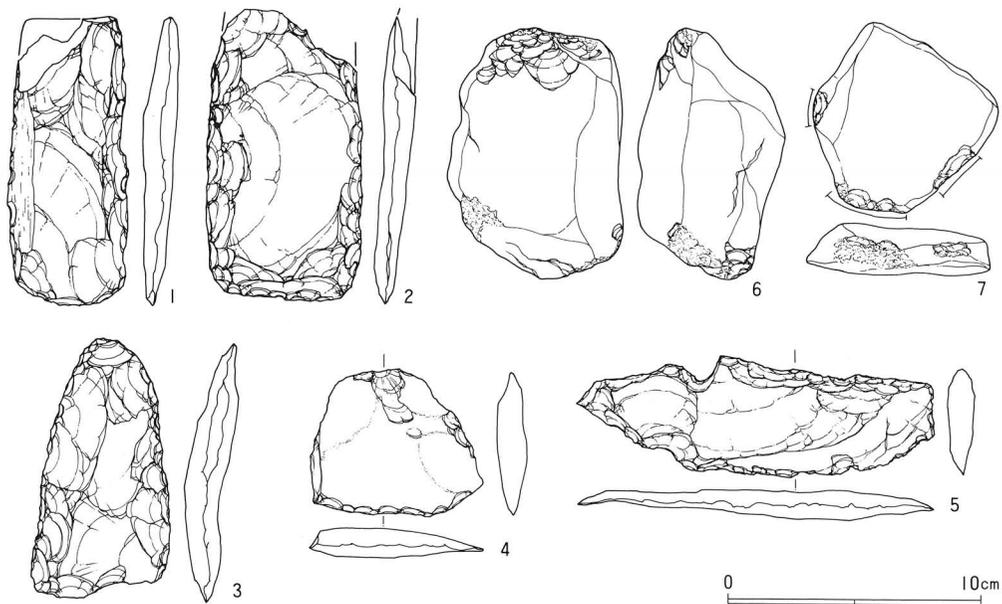
第6図 第1号住居址出土土偶 (1/2)

2. 土偶 (第6図) 住居址の覆土内より出土した。胴部破片で、右手を欠損する。所謂ポーズ形土偶である。手の表現が割割りアルで、そのポーズは現在東京国立博物館に所蔵されている山梨県御坂町上黒駒出土の土偶に類似している。頭部、脚部の接合部には接合痕が顕著にみられる。臀部の施文等より藤内期に帰属するものであると思われる。



第7図 珍部坂A・B遺跡出土石器1 (1/1.5)

3. 石器 (第7・8図) 今回の調査で検出された石器および黒曜石剥片等は一軒の住居址の割には機種、数量等が揃っている。しかし、凹石、磨石、石皿等の石器が欠如する。黒曜石を詳細に見た場合7種類に分類することができた。剥片の中で主流を占めるものは横剥ぎによる不定形な剥片で、63点中38点がこれに属する。両極打法による剥片も4点認められたが、所謂ピエスキューユは1点も確認することはできなかった。剥片で接合関係の認められるものや、ハンマーストーンなども認められ、住居内で黒曜石の剥片生産が行われていたことが窺えた。



第8図 珍部坂A第1号住居址出土石器2 (1/3)

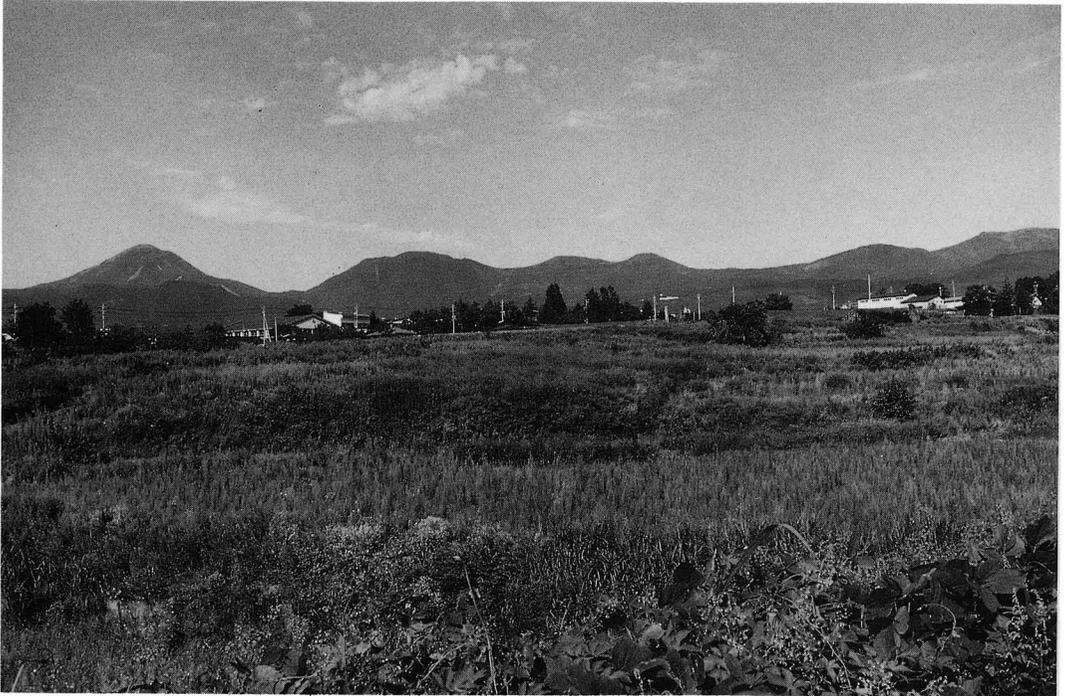
第V章 結 語

珍部坂A・B遺跡は、縄文時代中期前半の小規模な遺跡である。今回の調査によって遺跡の時期、内容の一部が把握されたことは大きな成果であり、周辺の遺跡との関連を考える上に貴重な資料を提供することができた。

今回の調査で検出された遺構、遺物は中期前半の遺跡としては少量であり、住居址も単独で検出され小規模な集落であることが確認できた。

従来このような小規模な遺跡において土偶が検出される例は希で、むしろ大集落に集中する傾向があることが指摘されている。このような小規模な遺跡に於いて土偶の検出がなされたことによって集落における祭祀遺物のあり方を再考する必要があるだろう。

集落間の相互関係の問題、遺跡立地・分布の問題等について詳細に分析することはできなかったが、今回の調査に於いて本遺跡だけの成果だけではなく、周辺の遺跡との相互関係も含め他の報告書で記述したい。



▲ 珍部坂A・B遺跡調査区遠景（南より）



▲ 第1号住居址（南より）



▲ 第1号住居址土偶出土状態



▲ 第1号住居址出土の土偶

珍部坂 A・B 遺跡

平成 3 年度県営圃場整備事業掘地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成 4 年 3 月 20 日 印刷

平成 4 年 3 月 24 日 発行

編集 長野県茅野市塚原 2 丁目 6 番地 1 号
発行 茅野市教育委員会

印刷 ほおずき書籍株式会社
